

臨地看護学実習評価が不合格となり留年となった学生の体験

- インタビューを用いた学生時代の振り返りから -

The Experiences of Students who Repeated a Year of University after Failing their Nursing Practicum Evaluations: A Study Based on Interviews with Former Students Concerning their Student Experiences.

臺 野 美 奈 子¹⁾

Minako DAINO

本研究の目的は、臨地看護学実習評価が不合格となり留年となった学生の体験と学業を継続することができた要因を明らかにすることである。対象は学生時代に臨地看護学実習が不合格になり留年した経験を持つ、卒後二年目の看護師 5 名である。データ収集方法は、半構成的面接を実施した。分析方法は、インタビュー内容を質的帰納的に分析した。結果は、【留年の原因】【不合格・留年時の心境】【指導時に学生を追い詰める要因】【学生を追い詰める実習環境】【不合格・留年時の親の反応】【学生が教員に求める教育実践】【立ち直りを支えた要因】【学生の自己理解を育む支援体制】【後輩へ送るメッセージ】【実践力強化を目的とした実習内容の見直し】の 10 カテゴリーが抽出された。不合格・留年学生はプレッシャーに弱く、指導時に過度に緊張しパニックになってしまう傾向があった。また、教員や実習指導者の指導方法や評価方法が学生を精神的に追い詰める要因となっていたなど、不合格・留年学生に必要な指導・支援方法が示唆された。

This study identifies factors that affect the ability of students who have failed their nursing practicums, and who are required to repeat a year of university, to continue with their student experience and their academic studies. Five nurses in their second year of work following graduation were included in the study. Data were collected using semi-structured interviews, and analyzed by qualitative inductive analysis using the following 10 categories: reason for repeating a year, the student's mental state at the time of the failed exam/when repeating the year, pressures felt by the student at the time of instruction, aspects of the training environment that increased the pressure felt by the student, the reactions of the student's parents to the news that the student had failed and would be repeating the year, educational activities requested of the teacher by the student, support for the student's recovery, support systems that fostered the student's self-awareness, messages sent to juniors, and review of practicum content to enhance practical skills. Students who failed and repeated a year tended to respond badly to pressure and to feel nervous and panicked during instruction. Furthermore, the results suggest that some of the methods of instruction, and some of other measures that were intended to support the failing/repeating students, including instructional and evaluation methods used by teaching staff and practicum instructors, actually contributed to the emotional pressure experienced by the students.

1) 天使大学看護栄養学部看護学科

(2014 年 1 月 8 日受稿、2014 年 5 月 20 日審査終了受理)

キーワード (Keywords) : 臨地看護学実習 (Nursing practicum)

不合格評価 (Failed evaluation)

留年 (Repeating a year of university)

I. 諸言

臨地看護学実習は多くの学生にとって特別な体験である。学生は机上の学習とは異なる医療現場の特殊性の中で、問題を内包する受け持ち患者との関わりを通して学習を展開していく。また、患者や看護師をはじめとする医療スタッフとの関係、教員や実習指導者との関係、実習グループ内の人間関係や看護過程を含めた学習の進め方など、学生はさまざまな課題を克服していかなければならない。

実習において学生はそれまでの教育で得た知識・技術に加え、今までの人生で形成された人格のすべての側面が試されることになる。本吉は、「暗記が中心の受験勉強をしてきた今の学生は与えられた問題を決まった方法で解く学習はできても、自ら問題を発見し、解決するという学習活動を習得する機会にほとんど恵まれていないのが現状である」¹⁾と指摘している。また、河野らは、「現代の学生は偏差値による輪切り教育によって人間関係が次第に希薄になりつつある小中高の学校生活の中で生き抜いて来る。この様な過程で育った学生の人格の歪みは臨床実習の様な総合性を要求される場では極めて明瞭な形で現れることになる」²⁾と指摘している。このような特徴を持つ学生たちは臨地実習においてさまざまな困難に遭遇する。平野らは、「途中で学習が継続できなくなる学生や、さらには留年・退学にいたる学生も少なくない」³⁾と述べている。適性・心理的傾向・問題解決能力等の理由により実習の継続を断念したり、実習終了後に評価が不合格・留年になる学生

もいる。また、「学生の中には、実習中の経験が外傷体験となり、退学してしまったり、卒業はしたものの看護職に就くことをあきらめたり、さらには看護師として日々患者の援助をしながらもその経験を乗り越えられない者も少なからず存在する」⁴⁾と舟島は述べている。これは、臨地実習での体験が学生の心にしこりを残し、結果的には人生を変えてしまうほどの影響力があることを示唆している。

時代の流れに伴い看護学の知識は増え続け、看護基礎教育に求められる課題も多くなっていくことが今後も予想される。また、「学生の学力・理解力・人間関係の持ち方が、年々弱体化し、退学か休学か留年か、いずれかの理由により修業年限で卒業できない学生が増えている」^{5),6)}という報告もある。よって、このような学生が年々増加している原因や実態を明らかにすることは看護基礎教育において重要であり、かつ急務であると思われる。

看護学生の臨地実習におけるつまずき体験に関する研究では、「臨地実習において学生は、患者や教員・指導者との人間関係においてつまずくことが多く、つまずいた学生は短期間実習を休むことで、ストレスを軽減し、不適応状態から回避することができる」^{7),8)}ということを、ストレスコーピング理論をもとに質的因子探索によって明らかにしたものがある。これらの研究は、さまざまな悩みや不安を経験し中途退学思案などの学業不適応感を強く持ちながらも、休学や留年をすることなく修業年限で卒業することができた学生について

てのものである。しかしながら、看護学生の留年体験に焦点を当てた研究や臨地看護学実習が不合格になり留年となった学生の体験について明確にされた研究はなかった。そこで、臨地看護学実習評価が不合格となり留年となった体験をもつ看護師の回想をもとに、不合格・留年の体験と学業を継続することができた要因について明らかにし、不合格・留年を経験している学生たちの指導・支援方法および看護基礎教育に対する示唆を得る目的で本研究に取り組んだ。

Ⅱ. 研究の目的

臨地看護学実習評価が不合格となり留年となった学生の体験と彼らが学業を継続できた要因を明らかにし、臨地看護学実習が不合格になり留年となった学生の指導・支援方法を検討する。

Ⅲ. 研究の方法

1. 研究対象者

学生時代に臨地看護学実習評価が不合格となり留年した経験を持ち（不合格になった科目数や学年は関係ない）、現在病院に勤務している卒後二年目の看護師とした。この時期は日々の業務にも慣れ、心理的に余裕ができ自己を客観的に振り返ることができる時期であると考えたからである。

2. データ収集方法

- 1) 半構成的面接を実施した。インタビュー内容は、不合格評価、留年をどのように受け止めたか、どうして不合格・留年になったと思うか、途中で挫折せず看護師としての今日があるのはなぜか、教員または、臨床指導者から十分に指導を受けられたか、同じような体験をした後輩に何か伝えたいことはあるか、不合格、留年

の経験を現在どのように思っているかなどについてインタビューガイドを作成し、実施した。インタビュー所要時間は平均64分であった。

- 2) インタビューは2006年5月25日から10月29日まで行った。

3. データ分析方法

インタビュー内容は、研究参加者の許可を得て録音した。インタビュー内容から逐語録を作成し、逐語録のすべてをデータとした。次に、質的帰納的分析方法に基づき、データを意味内容からコード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。さらに、抽象レベルでの類似性でコアカテゴリー化を行った。また、分析内容の信頼性、妥当性を確保するため指導教授と分析内容の検討を重ねた。

4. 倫理的配慮

医療機関に研究協力の依頼をし、研究協力が得られた医療機関の看護部長および看護師長に研究計画書を提示して研究の趣旨と内容を説明した。そして、看護師長を通じて看護スタッフ全員に研究の趣旨を説明してもらい、その中から研究参加の意向があった対象者本人から直接連絡をもらった。後日、直接対象者に会って研究の趣旨と方法を口頭・書面で説明し、同意書を交わした。

Ⅳ. 結果

1. 対象者の特性

北海道内の4施設の医療機関から5名の看護師の協力が得られた。女性が4名、男性が1名で、年齢は23～26歳（平均24.4歳）であった。全員が3年課程の看護専門学校の出身者であった。

2. 体験から抽出された内容

インタビュー内容の分析の結果、全コード数1229、サブカテゴリー79、カテゴリー29、10のコアカテゴリーが抽出された。得られたコアカテゴリーを研究目的に沿い分類・集約した結果、「不合格・留年学生の体験」「不合格・留年学生を支えた

要因」「後輩へのメッセージ」「臨地看護学実習への要望」の4つに分類することができた。以下、この分類に沿って説明する。なお、コアカテゴリーを【 】、カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは〈 〉で示す。詳細は、表1～表4を参照。

表 1-1. 不合格・留年学生の体験

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
留年の原因	不合格評価の予感	評価に対する予感	・自分でも不合格を覚悟していた
	予測される不合格・留年の原因	不合格・留年の原因	・一番の原因は自分自身にある
		実習と記録で精神的に余裕のない学生	・学生は実習に行くだけで大変 ・学生は家に帰ってきてからも記録がある
		実習によってバランスがとれなくなった日常生活	・まる2日間寝ないで病棟へ行き、必死でケアを行った
		やる気がなく不誠実な実習態度	・実習中の自分の態度は凄く悪かった ・実習中、教員から不誠実だと言われていた
		合格ラインに達しなかった実習記録	・期日までに看護記録が全然間に合わなかった ・分析、解釈が甘かった
		勉強不足で書けない看護過程	・解剖学とか病理が苦手だった ・記録が全然書けなかった
	曖昧だった看護師志望の動機	将来性がある看護師の仕事	・とりあえず資格をとりなさいと親に言われた
		世話好きが理由の看護師志望	・人の面倒を見るのがすごく好きで、世話好きだった
不合格・留年時の心境	不合格・留年時の心境と行動	不合格・留年時の衝撃と動揺	・留年を知った時、このままベランダから落ちて死ぬかもしれないとか、走っている車に飛び込みそうになるまで精神的に落ち込んだ ・私はうつになっていた
		不合格評価を知った時の行動	・教員のところへ行った ・教員に落ちた理由を聞いた
	評価への割り切れなさや学業継続への諦め	割り切れない不合格・留年評価	・ここまでやってきたのに留年だった ・留年を自分の負い目と思い込んでいた
		学業継続への諦め	・自分は落ちたんだから、学校を辞めようと思っていた

表 1-2. 不合格・留年学生の体験

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
指導時に学生を追い詰める要因	指導時のプレッシャーに苦しむ学生	実習や指導に緊張しパニックになる学生	・看護過程の指導を受けている時、教員から他には、他にはと、言われた ・緊張して患者に声かけができない
		プレッシャーに弱く自分を追い詰める学生	・実習をやめたかった
		厳し過ぎる指導に怯える学生	・看護過程をいくらやってもずっと教員になおされた ・教員が厳しいオーラを放っているだけで、聞きたいことも聞けない学生が多い
	学生を精神的に追い詰める指導態度	感情的で学生の人権を無視した振る舞いをする教員	・患者のいるところで教員に否定された
		プレッシャーを与え精神的に追い詰める教員	・教員はもう一人の子（学生）と、私を比較していた
		具体性がない看護過程の指導方法	・教員はやってきた物（看護過程）に対して、チェックをするという感じだった
		実習中に不合格・留年の可能性を予告する教員	・実習途中で教員から、不合格評価を言われた
	学生の感情に影響を与える対等ではない学生教員関係	教員に対しぎこちなく素直になれない態度	・教員に対して私は妙に気を回していた
		学生と教員の対等ではない関係	・教員に悪い、悪いと、言い続けられると、私も何が悪いんだと怒ってしまう
学生を追い詰める実習環境	一貫性のない教育方法への混乱	指導教員や評価方法の違いに混乱し疑問を抱く学生	・教員の指導方法の違いにあっけにとられた
		未熟で一貫性のない指導方法や評価方法	・教員に平等に指導して欲しいとは言えなかった
		期間が短縮され形態も変わった再実習	・再実習は（期間が）縮小された
	精神的に追い詰める看護師の態度や実習病棟の雰囲気	印象が悪く好ましくない実習病棟	・実習病棟はあまりいい病棟ではなかったような気がする
		学生にプレッシャーを与え精神的に追い詰める看護師	・病棟の看護師にこんな計画でほんとうに援助できると思っての、私は言われた
		学生は看護師のストレス解消の対象	・病棟の看護師に看護学生なんてストレスの解消の場でしょうと、直接言われたことがある
		学生にとって実習場は戦いの場所	・学生にはあそこ（実習場）は戦いだという気持ちがある

表 1-3. 不合格・留年学生の体験

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
不合格・留年時の親の反応	留年時の親の反応	留年を知った親の反応	・親は私の頑張っている姿を見ていたので、ダメなわけがないと思っていた
		学校に対する親の批判的意見	・親は学校は看護師になるための学生を受け入れているのだから、簡単に卒業できないとか、留年するとか言うことではないのではないかと、教員に言った
	親の教員への反応	学校から呼び出された親	・親は学校から私が卒業できないかもしれないので、相談があるので来てくださいますと、言われた
		留年理由を聞きに学校を訪ねる親	・両親は何で落ちたのかと思いながら学校に来た
学生が教員に求める教育実践	つまずき学生を育む指導環境	できない学生に対する指導方法	・出来ない子には出来ない子なりの指導の方法が必要
		同じ教員による留年後の実習指導	・落としたなら最後まで面倒を見て欲しい、ほったらかすのはやめて欲しい ・落とした先生が私を一番わかっていると思う
		明るく楽しい教員や病棟の雰囲気	・病棟の雰囲気も良く、教員も良いのが理想
		面倒みが良く愛情深い教員による指導	・どの先生も面倒みが良かった ・先生の愛情がなかったら私は今ここにはいない
		指導者に重要な察する能力	・先生には察する能力が必要
	最後まで見放さずフォローしてくれる教員	教員に見放されたら落ちるしかない学生	・学生は先生に見放されたと思うと、もう落ちていく一方で誰を頼っていけばいいのか、わからなくなる
		国家試験合格までフォローをし続けた不合格評価を下した教員	・先生は私が落としたんだから、最後まで面倒みると、言った ・先生が真面目に、真剣に私にぶつかってきてくれているのに、私は逃げるわけにはいかない

表 2-1. 不合格・留年学生を支えた要因

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
立ち直りを支えた要因	団結し励まし合った留年仲間や同級生	励まし合った留年仲間	・同じ状況（留年）の仲間がいて、一緒に頑張って勉強しようと言っていた
		実習中仲間意識が強くなる実習生	・下から上がってきても（進級）、上から降りてきても（留年）、同じ戦場に行くので仲間意識が強くなる
	親や友人、グループメンバーや患者からの支援や励まし	留年組に対して差別的な扱いをしなかったグループメンバー	・実習メンバーに最後まで助けてもらった ・留年後の実習グループは私が留年したことに対して、差別の目では見なかった
		親や友人からの支援や協力	・周りのサポートや、友人が凄いい励みになった ・母はここまできたんだから、もうちょっとだから頑張るなさいと、言った
		見守りながら励ましてくれた患者	・患者はよく学生を見ている ・患者は緊張しすぎないで、もっと堂々としているようにと、言ってくれた
	親身になってアドバイスをくれる教員やコメディカルスタッフ	失敗する経験が大事だと励ましてくれたコメディカルスタッフ	・私が失敗した時、他のコメディカルスタッフが失敗してよかったんだよと、言ってくれた
		公平的な態度で親身になってアドバイスをくれる教員	・先生は何かあったらすぐに言うようにと、言ってくれた ・私は先生に辛いことを相談し、アドバイスをもらった
	看護師資格取得に向けての自己努力	自分のプライドと看護師資格取得の願い	・私にはプライドがあった ・留年後の再実習を必死でやった
		国家試験合格までは挫折をしないという決意	・3年次で留年した時ここで辞めるのはもったいないと、思った
		積極的に学習し看護記録が書けるようになった留年後	・私は留年した年から少し勉強するようになり、自然と記録が書けるようになった

表 2-2. 不合格・留年学生を支えた要因

	看護師への決意を固めるきっかけとなった患者や看護師との出会い	看護師を本気で決意させた患者の生き方や患者からの信頼	・途中で挫折せず看護師としての今日があるのは、その患者さんがいたからだ
		理想の看護師との出会い	・こういう看護師さんになりたいと思う人がいた
	特別に考慮され工夫された実習方法と実習環境	短期休暇や学内実習などが取り入れられ工夫された実習	・実習が終わる少し前にお休みをもらい、それから復帰した ・教員たちは私を実習場から少し離し、学内実習をさせた
		自分を冷静に見つめ立て直すことができた短期休暇	・短期間実習を休むことで今後の計画を考えたり、自分の立直しをした ・煮詰まって、余裕がなくなった自分を冷静に見つめ直す期間が必要
		指導方法や評価方法の変化	・教員にしっかり指導してもらった時に、理解することができた ・教員の中には記録だけ見ていいるのではないと、言った教員もいた

表 2-3. 不合格・留年学生を支えた要因

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
学生の自己理解を育む支援体制	学生・指導者間の共感的人間関係	指導者には共感する態度と愛情が必要	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が厳しくても、自分のために言ってくれていると学生が思えることが大切 ・教員が厳しくても、そこに愛情があれば学生は頑張る
		指導者は学生時代の思いを振り返る事が大切	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者自身が自分が指導されてきた時に、どのように思ったのかをもう一度考えて欲しい
		学生が何かを掴み取れるように共に考えてくれる教員の姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・実習の成果は達成できなかったのではない ・指導者には学生が実習に来て自分なりに何かを掴み取れるように指導して欲しい
	学生の自己理解を促進する支援体制	ゆとりとチャンスを与える実習環境	<ul style="list-style-type: none"> ・実習全体にもっとゆとりが必要 ・学生に自分で掴めるような環境や、チャンスを与えていれば厳しさはいらない
		話を聞いてくれる教員やスクールカウンセラーの存在	<ul style="list-style-type: none"> ・教員以外にもスクールカウンセラーのような人が必要 ・先生が私を落としてくれて、最後までフォローをしてくれたおかげで、自分を嫌いだった私が自分を好きになれた
		自分の行動や考えを客観視できるプロセスレコード	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセスレコードは自分を客観的に見つめていくもの ・自分の精神的な面はプロセスレコードで修正することができる

表 3-1. 後輩へのメッセージ

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
後輩へ送るメッセージ	意味のある不合格・留年評価	適切だった不合格・留年評価	<ul style="list-style-type: none"> ・留年せず、そのままストレートで卒業することは自分自身でも納得できない ・先生は正しかった
		悲観することはない留年評価	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や周り、先生を責めるのではなく経験だと思えることが大事 ・留年したり、単位を落すことは恥ずかしいことではない
	退学はせず看護師という夢を叶えて欲しいという願い	早すぎる退学の決意	<ul style="list-style-type: none"> ・学校には看護師を目指して来たのだから、辞めずに卒業まで頑張っただけ欲しい ・私は粘って良かった
		看護師は責任とやりがいのある素晴らしい仕事	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師はほんとうにすごい仕事 ・看護師は技術も必要とされるが、心のケアができる凄いい仕事
	自分を追い込まない方法	納得できないことや意思を伝えることが重要	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が納得できなければ、納得できるまで聞くことが大切
		相談できる支援者を持つことの重要性	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が何もしてくれない場合は第3者、第4者に聞くことも必要
		留年中は行動し成長することが大切	<ul style="list-style-type: none"> ・留年した一年を自分がどのように思い、行動するかで自分が変わる

表 3-2. 後輩へのメッセージ

留年経験から学び得たもの	チャンスと思えるようになった挫折や失敗	<ul style="list-style-type: none"> ・留年を経験してから次に挫折をしても、いい経験だと思えるようになった ・私は挫折をチャンスと思うようになった ・私は留年経験で強くなれた
	結果的には良かった留年経験	<ul style="list-style-type: none"> ・もう一度勉強できたので良い経験になった ・留年したことで友達もできて、いろいろ学べた
	人の心情を察する余裕が持てるようになった留年後	<ul style="list-style-type: none"> ・私は留年したことで、頑張っているけどできない人の表情や、心情を察することができるようになった
	留年を経験し持てるようになった学生への愛情	<ul style="list-style-type: none"> ・できないとか、甘いとかは学生の証しなので安心していい ・私は実習生に愛情がある
	教員への感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業する時に先生たちに、留年にしてくれてありがとうございましたと言った ・私を落とした先生には感謝している
看護師になった現在の心境	辛いことも多いが満足している看護師の仕事	<ul style="list-style-type: none"> ・私は看護師を選んでよかった ・私は今、とにかく患者さんと接することが楽しい ・私は看護師の仕事が楽しい
	今でも心に残る自分への後悔と留年評価への割り切れなさ	<ul style="list-style-type: none"> ・学生時代にもう少し努力していれば良かった ・今でも、不合格になった原因が腑に落ちない

表 4. 臨地看護学実習への要望

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実践力強化を目的とした実習内容の見直し	実践力強化を目的とした実習記録と指導方法	余分なものはぶき必要性のあるものだけを使用する実習記録	・実習記録はいらないものはぶくことも必要
		将来性を視野に入れた実践力の指導が重要	・いくら考えても技術面の習得ができなければ、実践力を必要としている現場には意味がない ・頭でっかちを輩出しているように思う今の教育 ・学生の教育は重要
	実践力強化を目的とした技術面の充実	学生の実践可能な範囲を広げ技術面を充実させる病棟実習	・学生の実践可能範囲を広げ、統一することが実習には必要 ・実習で学生ができることが増えれば、今の自分ももっと変わったのではないかと思う
		学生は根拠にとらわれ過ぎず体験することが重要	・学生時代はとりあえずやらせてみるのが大切

1) 不合格・留年学生の体験

(1) 不合格・留年を体験した学生は実習中の自分の様子から《不合格評価の予感》があった。〈実習と記録で精神的に余裕のない学生〉〈実習によってバランスがとれなくなった日常生活〉〈やる気がなく不誠実な実習態度〉〈合格ラインに達しなかった実習記録〉〈勉強不足で書けない看護過程〉が《予測される不合格・留年の原因》だと考えていた。また、〈将来性がある看護師の仕事〉〈世話好きが理由の看護師志望〉など《曖昧だった看護師志望の動機》が【留年の原因】だった。

(2) 不合格・留年を体験した学生の《不合格・留年時の心境と行動》は学生個々にさまざまであったが、〈不合格・留年時の衝撃と動揺〉は大きかった。学生の中には《評価への割り切れなさや学業継続への諦め》を抱く学生もいるなど、【不合格・留年時の心境】は危機的状態であった。

(3) 不合格・留年を体験した学生の中には、〈実習や指導に緊張しパニックになる学生〉〈プレッシャーに弱く自分を追い詰める学生〉〈厳し過ぎる指導に怯える学生〉など、《指導時のプレッシャーに苦しむ学生》がいた。また、〈感情的で学生の人権を無視した振る

舞いをする教員〉〈プレッシャーを与え精神的に追い詰める教員〉〈具体性がない看護過程の指導方法〉〈実習中に不合格・留年の可能性を予告する教員〉などの《学生を精神的に追い詰める指導態度》や、《学生の感情に影響を与える対等ではない学生教員関係》が**【指導時に学生を追い詰める要因】**であった。

- (4) 不合格・留年を体験した学生の中には、〈指導教員や評価方法の違いに混乱し疑問を抱く学生〉がいた。また、〈未熟で一貫性のない指導方法や評価方法〉〈期間が短縮され形態も変わった再実習〉といった《一貫性のない教育方法への混乱》があった。さらに、〈印象が悪く好ましくない実習病棟〉や、〈学生にプレッシャーを与え精神的に追い詰める看護師〉との関係性の築き方に困難を感じ、〈学生は看護師のストレス解消の対象〉〈学生にとって実習場は戦いの場所〉と考えるなど、《精神的に追い詰める看護師の態度や実習病棟の雰囲気》が**【学生を追い詰める実習環境】**であった。

- (5) 《留年時の親の反応》は〈学校に対する親の批判的意見〉を学校に申し出ることだった。また、《親の教員への反応》は〈留年理由を聞きに学校を訪ねる親〉〈学校から呼び出された親〉など、**【不合格・留年時の親の反応】**は衝撃と動揺を伴うものであった。
- (6) 不合格・留年学生は〈できない学生に対する指導方法〉の工夫や、〈同じ教員による留年後の実習指導〉を望み、〈明るく楽しい教員や病棟の雰囲気〉〈面倒みが良く愛情深い教員による指導〉〈指導者に重要な察する能

力〉が《つまり学生を育む指導環境》であると考えていた。また、〈教員に見放されたら落ちるしかない学生〉の弱い立場を吐露する一方で、〈国家試験合格までフォローを続けた不合格評価を下した教員〉や、《最後まで見放さずフォローしてくれる教員》が、不合格・留年**【学生が教員に求める教育実践】**であると考えていた。

2) 不合格・留年学生を支えた要因

- (1) 不合格・留年学生には《団結し励まし合った留年仲間や同級生》がいた。〈留年組に対して差別的な扱いをしなかったグループメンバー〉〈見守りながら励ましてくれた患者〉を含む《親や友人、グループメンバーや患者からの支援や励まし》が不合格・留年学生の心理的な支えとなっていた。失敗する経験が大事だと励ましてくれたコメディカルスタッフ〈公平的な態度で親身になってアドバイスをくれる教員〉など、《親身になってアドバイスをくれる教員やコメディカルスタッフ》がいた。また、〈自分のプライドと看護師資格取得の願い〉〈国家試験合格までは挫折をしないという決意〉や、〈積極的に学習し看護記録が書けるようになった留年後〉など、《看護師資格取得に向けての自己努力》があった。〈看護師を本気で決意させた患者の生き方や患者からの信頼〉〈理想の看護師との出会い〉を含む《看護師への決意を固めるきっかけとなった患者や看護師との出会い》があった。さらに、〈短期休暇や学内実習などが取り入れられ工夫された実習〉〈自分を冷静に見つめ立て直すことができた短期休暇〉〈指導方法や評価方法の変化〉など、

《特別に考慮され工夫された実習方法と実習環境》が不合格・留年学生の【立ち直りを支えた要因】だった。

(2) 不合格・留年学生は、〈指導者には共感する態度と愛情が必要〉〈指導者は学生時代の思いを振り返る事が大切〉であり、〈学生が何かを掴みとれるように共に考えてくれる教員の姿勢〉など、《学生・指導者間の共感的人間関係》が必要であると考えていた。また、《学生の自己理解を促進する支援体制》として〈ゆとりとチャンスを与える実習環境〉の工夫や、〈話しを聞いてくれる教員やスクールカウンセラーの存在〉〈自分の行動や考えを客観視できるプロセスレコード〉の活用などが、【学生の自己理解を育む支援体制】であると考えていた。

3) 後輩へのメッセージ

学生時代に不合格・留年を体験した看護師は、不合格・留年を経験している【後輩へ送るメッセージ】として、〈適切だった不合格・留年評価〉〈悲観することはない留年評価〉と、不合格・留年評価を振り返り《意味のある不合格・留年評価》であったと現在は考えていること、〈早すぎる退学の決意〉はしないこと、〈看護師は責任とやりがいのあるすばらしい仕事〉と実感していること、不合格・留年評価を下されたとしても《退学はせず看護師という夢を叶えて欲しいという願い》を持っていた。また、実習中は〈納得できないことや意思を伝えることが重要〉であり、〈相談できる支援者を持つことの重要性〉など、《自分を追い込まない方法》を身につけて欲しいと考

えていた。《留年経験から学び得たもの》は、〈チャンスと思えるようになった挫折や失敗〉〈結果的には良かった留年経験〉〈人の心情を察する余裕が持てるようになった留年後〉〈留年を経験し持てるようになった学生への愛情〉だった。また、〈教員への感謝〉が語られた。《看護師になった現在の心境》は〈辛いことも多いが満足している看護師の仕事〉と考えている一方で、〈今でも心に残る自分への後悔と留年評価への割り切れなさ〉を抱き続けていた。

4) 臨地看護学実習への要望

学生時代に不合格・留年を体験した看護師は、〈余分なものをばぶき必要性のあるものだけを使用する実習記録〉や、〈将来性を視野に入れた実践力の指導が重要〉であると考え、《実践力強化を目的とした実習記録と指導方法》の工夫を求めている。また、《実践力強化を目的とした技術面の充実》など、【実践力強化を目的とした実習内容の見直し】が必要であると考えていた。

V. 考察

1. 不合格・留年学生の体験

不合格・留年を体験した学生は実習中の自分の様子から不合格評価を予感していた。また、実習や記録によって精神的に余裕のない状況になっていたことや、実習記録が合格ラインに達しなかったこと、将来性があるからという曖昧な動機で看護師を志望したことなどが不合格・留年評価の原因であったと考えていた。

評価を下された時の学生の心理的衝撃と動揺は大きく、学生の中には教員に不合格評価の理由を

聞きに行く者や、現実のショックから泣き続けていた者などさまざまな心理的反応を示していたことが明らかになった。

また、学生の中には不合格・留年評価の妥当性に疑問を持ち、割り切れない思いを抱く者や、留年による挫折感から立ち直れず学校を辞めようとする者がいた。これは、「学生は、納得できない評価に対し、不快感・疑問・悔しさ・不満・落胆を示し、評価を否定的に受け止めている。評価を妥当と受け止められない学生の背景に、学生に対する説明不足や対処の不十分さがある」⁹⁾という結果と類似している。よって、教員は不合格・留年評価の理由を学生が納得するまで詳細に説明する必要がある。さらに、評価の妥当性について教員と臨床指導者（実習病棟の指導看護師）双方の意見や見解を一致させることが重要である。

また、実習中の指導にプレッシャーを感じ苦しんでいる学生がいた。橋掛らは、「指導者は自分の言動が学習を阻害しているとほとんどの場合意識していないが、学生は教室と全く異なる環境のなかで精神的に緊張し、学習をしているため指導者の否定的な言動に遭遇すると、感情的にパニックになり、指導を受けたことにより否定されたという心理的な悪影響が残る」¹⁰⁾と指摘している。したがって、教員は常に自分の言動や態度を振り返り、冷静に自らを分析することが重要である。

また、実習中に不合格・留年の可能性を予告する教員がいた。「指導の際に学生の認識を揺さぶることで刺激を与えたとしても、個人を丸ごと否定するような言葉かけはプラスにはつながらない」¹¹⁾と西久保らは指摘している。教員は実習場において自分の言動が学生に多大な影響力を持つということを自覚し、学生を尊重した関わり方をすることが重要である。

さらに、学生は教員や評価方法の違いに疑問を持ち、一貫性のない指導方法や評価方法に混乱していた。実習場において、指導に当たる教員（専任教員または、指導教員）と評価者（専任教員）が異なるということがある。この場合、学生に対する両教員の評価に対する考えに相違があれば、その学生は混乱し教員に対して不信感を抱く可能性がある。また、教員への不信感は学生の不安を増大させ、学習意欲を低下させる原因となる。よって、両教員は学生に対する評価を一致させるための努力をすべきである。

また、専任教員のバックグラウンドはさまざまであり、一様に同等の指導力を求めることは不可能に等しい。よって、当然のことながら、指導経験の少ない教員は一貫性のない指導を行う可能性が高いと言える。しかしながら、Theis は「学生には指導を受ける教員が有能で責任感があり聡明であることを期待する権利がある」¹²⁾と述べている。したがって、教員は自分の指導方法や評価方法について振り返る機会を持ちながら、自己研鑽し続けることが重要であると考えられる。

実習場の看護師の言動や態度、さらには実習病棟の雰囲気や学生を精神的に追い詰めていた。これは、特殊な環境である臨地実習で学生はさまざまな不安や緊張を抱え精神的に余裕のない状況になっていること、実習場では学生の人権が尊重されず必ずしも学生が安心して学べる環境ではない、ということが推測された。舟島は、「実習中の学生は達成感や看護する喜びと同時に怒りや悲しみを経験し、倫理的ジレンマやそれによる道徳的葛藤を経験している」¹³⁾と述べている。また、学生を取り巻く実習環境は感情面だけではなく学習効果に影響を及ぼす重要な要因である、と結論づける報告もある¹⁴⁾。したがって、学生が脅威を感じる

ことなく安心して実習を行うことができなければ、その潜在能力が発揮されず将来の可能性までも奪ってしまうことになるだろう。よって、学生の人権が尊重され学びやすい実習環境を提供するために、慎重に実習施設を選択すると同時に実習施設の指導者と密に連携をとり協力し合って指導にあたることが重要である。また、教員・指導者・看護スタッフは自分自身が学生のロールモデルであるということを自覚するとともに、自分が学生だった時の思いを忘れずに指導にあたるべきである。

また本研究では、学生の不合格・留年評価が彼らの親にとっても衝撃と動揺を伴うものであったことが示唆された。留年評価が学生の教育的効果を目的とした決断であることをこのような親に対して十分に説明する必要がある教員にはある。逆に、教員の前や実習場では見せない学生の側面に関して親から情報提供してもらい、学生を多面的に理解するように努力することも必要であろう。

2. 不合格・留年学生を支えた要因

不合格・留年を体験した学生は個々の段階に合った指導を望んでいた。また、留年後も同じ教員が引き続き指導にあたり、自分の成長した姿を見て評価して欲しいと思っていた。したがって、教員はできるだけ時間をかけて学生一人ひとりの能力や個性に合った指導を心がける必要がある。たとえ学生がつまずいたとしてもその時点だけで能力や適性を判断せず、彼らの可能性や成長を信じて根気よく関わっていくことが必要である。インタビューの中では、学生に不合格評価を下した後にもその学生が国家試験に合格するまで支え続けた教員がいた。学生が挫折を乗り越えて成長していくためには、このような継続的な教員の支えが必要だと考える。

また、学生は明るく楽しい教員、面倒見が良い愛情深い教員、察する能力に優れた教員を望んでいた。これらは、「学生が考えている優れた教員とは、親しみやすく、かつ、よく支えてくれる人である。また、学生と気持ちを分かち合い、患者に関することを語り合う機会をうまく作ることができる能力も、優れた教員の資質だと言われている」¹⁵⁾という Gaberson らの結果と類似している。

不合格・留年を体験した学生が挫折経験から立ち直るためには、同じ境遇にある留年仲間の存在や友人・教員・親・患者の支えや励ましが重要であった。また、コメディカルスタッフが学生を見守り、勇気づけていたことが明らかになった。実習場において忙しく動き回っている看護師以外に自分を見守ってくれる人がいると感じることは学生の心に安心感をもたらすものと推測される。

また、患者の生き方や患者からの信頼、さらには理想の看護師との出会いが看護師になることを本気で決意させる要因となっていた。これは、「〈患者さんの頑張っている姿から自分の人生を考えることができた〉〈辛いときでも患者さんのことを考えると励みになった〉と学生は、患者を中心とする人との関わりの中から看護学校に進学してよかったと、自分の職業選択を前向きに捉えることができるようになっていく」¹⁶⁾という結果と類似している。また、学生が看護師を志望する動機には看護師への憧れがある。実習場において自分の理想とする看護師の姿を目の当たりにしたことが、看護師を決意させるきっかけとなりうることは当然のことであると考えられる。

さらに、短期休暇や学内実習といった特別に考慮された実習形態が疲労した学生の心身を回復させるきっかけとなり、自分を冷静に見つめて立て直す機会となっていたことが明らかになった。朝

月らは、「看護学生は臨地実習中に1,2日程度の短期休暇をとり、《身体休息による自己回復》や、《ストレスに立ち向かわなくてもよい安心感》など問題解決的コーピング・感情調節的コーピングをし、不適応状態から回避できていた」¹⁷⁾と述べている。したがって、教員は学生の状況を詳細に観察し、実習継続が困難であると判断した場合は速やかに実習を中断させ、休養を与える決断をすることが重要であるとする。そして、その短期間の休養が学生の実習単位等に影響することなく学生が安心して休養をとり、回復した後に実習を再開することができるような支援体制を構築する必要があると考える。

不合格・留年学生は学生・指導者間に共感的な関係性を求めていることが本研究で明らかになった。Bergmanらは、「看護実践教育において教員が学生との関係性を保っていくことが最も重要である」¹⁸⁾と述べている。また、平野らは、「【学生を理解しようとつとめること】【困った時に一緒に考え、助けてくれること】など教員の共感的で学生を理解しようとする態度が、学習の効果的な支援となる」¹⁹⁾と述べている。したがって、教員は親しみやすく共感的な態度で学生と関わり、信頼関係を築く努力をしていく必要がある。

3. 後輩へのメッセージ

学生時代に不合格・留年を体験した看護師の中には不合格・留年評価が自分にとっては適切なものであり、意味のあるものであったと認識している者がいた。そして、留年をしても絶対にあきらめずに、夢を叶えて欲しいという願いを持っていた。また、人の心情を察することができるようになったことや、留年を経験して学生に愛情が持てるようになったなど、不合格・留年という人生の

逆境を乗り越えて人間的に成熟していたことを推測させる。さらに、看護師の仕事にやりがいと満足感を持っていた。

また、不合格・留年評価を下した教員に対して感謝の気持ちを持っていたことも明らかになった。これは、教員が適切な時期に不合格・留年評価という適切な判断をし、その後、学生の成長を信じて支えてくれたことに対する思いであると推測される。しかし、一方では実習中の自分の力不足を振り返り看護師になってからも後悔し続けていた者や、不合格・留年評価に対して納得していない看護師がいた。後者については、教員が不合格・留年評価の妥当性について十分に説明していなかったことが推測される。よって、教員は慎重に検討を重ねたうえで最終評価を決定することが重要である。

4. 臨地看護学実習への要望

学生時代に不合格・留年を体験した看護師は実践力強化を目的とした実習記録と指導方法の見直しを要望していた。藤岡らは、「近年、看護学の知識はめざましい勢いで増え続けている。医療の高度化に伴い、看護で求められる課題は多くなった。言語化できないと学問として発展しないという理由で膨大な記録が学生に課せられる。」²⁰⁾と述べている。しかし、この膨大な記録が実践力強化に十分な効果を示していないことが本研究では示唆された。インタビューで対象者が指摘したように教員は記録の指導に重点を置きがちになり、実践面の指導が弱くなっていることがうかがわれた。

さらに本研究の対象者は、学生が実践可能な看護技術の範囲を拡大する必要がある、と主張していた。しかし、「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」²¹⁾において資格を

持たない学生の看護技術の実施基準が定められている。よって、基準範囲外の技術を体験することは不可能である。しかし、学生の実践力の強化を目指し、学生の主体的な学習行動や判断力を育成するためには教員と臨床指導者が連携を取り、実施基準範囲内の看護技術を可能な限り体験できるように配慮することが重要である。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究は対象者の記憶を辿るものであり時間経過に伴う記憶の違いや心理的な変化は当然あるものと推測される。よって、体験の全てを明らかにするには限界がある。また、今後は、本研究の対象者が看護師としてのキャリアを積み指導者の立場になった時に、臨地実習の教育方法についてどのような意見を持っているのかを明らかにする追跡調査を行っていくことも、看護基礎教育において重要であり、かつ意義があるものと考えている。

VI. 結論

1. 不合格・留年評価を下された時の学生の心理的衝撃と動揺は大きく、学生の中には評価の妥当性に疑問を持ち、割り切れない思いを抱く者や、留年による挫折感から立ち直れず学校を辞めようとする者がいた。

2. 教員・看護師の感情的で共感性のない指導態度や、印象が良くない実習病棟の雰囲気、一貫性のない指導方法・評価方法が不合格・留年学生を精神的に追い詰める原因となっていた。

3. 不合格・留年学生には団結し励まし合った留年仲間や、公平的な態度で親身に関わる教員の存在が重要だった。また、親や友人・実習場で

出会った患者や、コメディカルスタッフの支援や励ましが不合格・留年学生の心理的な支えとなっていた。さらに、留年後特別に考慮され工夫された実習方法や実習環境、看護師資格取得に向けての自己努力によって不合格・留年学生は学業を継続することができた。

4. 不合格・留年評価を下された学生に対し、教員は不合格・留年評価の理由を学生が納得するまで詳細に説明する必要がある。

5. 教員は学生に学びやすい実習環境を提供するために、実習施設の指導者と密に連携を取り協力し合って指導にあたることが重要である。

6. 不合格・留年を体験した学生は個々の段階に合った指導を望んでいた。教員はできるだけ時間をかけて学生一人ひとりの能力や個性に合った指導を心がける必要がある。また、学生が挫折を乗り越えて成長していくためには、継続的な教員の支えが必要である。

7. 不合格になり留年となった学生には、学生・指導者間の共感的な人間関係が必要である。さらに、学生の自己理解を促進するための支援体制を整備する必要がある。

謝辞

本研究の趣旨にご理解をいただき、ご協力をいただきました皆様に心より感謝申し上げます。また、研究計画書の段階から論文作成に至るまでご指導をいただきました岡田洋子教授に心より厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は旭川医科大学大学院医学系研

究科修士課程の論文を一部修正、加筆したものである。また、本研究の一部は第27回日本看護科学学会学術集会にて発表した。

引用文献

- 1) 本吉美也子:看護学生の学習の取り組みに影響する要因の研究, 札幌医科大学保健医療学部紀要, (7), 55-61, 2004.
- 2) 河野仁志他:臨床実習教育上の問題点のありかの検討, 北海道大学医療技術短期大学部紀要, 6, 55-66, 1993.
- 3) 平野美樹子, 藤田和子:学習への動機づけに影響を及ぼす看護教員の態度:看護学生の見方, 長岡赤十字病院医学雑誌, 17(1), 53-57, 2004.
- 4) 舟島なをみ:質的研究への挑戦, 第1版, 205, 医学書院, 1999.
- 5) 赤澤彌子他:看護学実習指導に対する評価と課題, 奈良県立医科大学看護短期大学部紀要, 2, 75-80, 1998.
- 6) 米津真紀他:学校をやめたいという気持ちを実習の中で乗り越えた過程の分析, 看護教育の研究, (18), 268-271, 2002.
- 7) 朝月真由美他:看護学生が臨地実習におけるつまずき体験で短期間休むことの意味, 日本看護学教育学会誌, 14, 104, 2004.
- 8) 斉藤孝子:臨地実習における看護学生のつまずき体験と解決に向けての資源活用, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, (26), 150-157, 2001.
- 9) 小山満子, 岡田洋子:看護学実習評価に対する学生の見解および妥当性に関する検討, 看護教育, 46(6), 483-488, 2005.
- 10) 掛橋千賀子他:臨床指導者の関わりと看護学生の実習意欲・行動との関係, 第26回日本看護学会論文集 看護教育, 20-22, 1995.
- 11) 西久保秀子, 町田秀子:教員および実習指導者による実習指導時の言葉の分析-学生に与えるプラスの影響, マイナスの影響-, 第34回日本看護学会論文集 看護教育, 195-197, 2003.
- 12) Theis, E. C.:Nursing students' perspectives of Unethical Teaching Behaviors, Journal of Nursing Education, 27(3), 102-106, 1998.
- 13) 前掲4), 206.
- 14) 竹本由香里他:臨地実習におけるストレス感情に影響を及ぼす要因の検討, 宮城大学看護学部紀要, 5(1), 87-94, 2002.
- 15) Gaberson, K. B., Mariltn Oermann, H.: Cilnical Teaching Strategies in Nursing, 1999. 勝原裕美子監訳:臨地実習ストラテジー, 第1版, 57, 医学書院, 2002.
- 16) 袖山悦子:実習指導教員の言葉・態度と学生の受け止め, Nurse eye, 13(10), 28-34, 2000.
- 17) 前掲7)
- 18) Bergman, K., Gaitskill, T: Faculty and Student Perceptions of Effective Clinical Teachers, An Extension Study, Journal of Professional Nursing, 6, (1), 33-44, 1990.
- 19) 前掲3)
- 20) 藤岡完治他:学生とともに創る 臨地実習指導ワークブック, 第2版, 12, 医学書院, 2001.
- 21) 厚生労働省医政局看護課:看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書, 厚生労働省, 2003.